

さまざまな人と活動が交錯する都市のような美術館

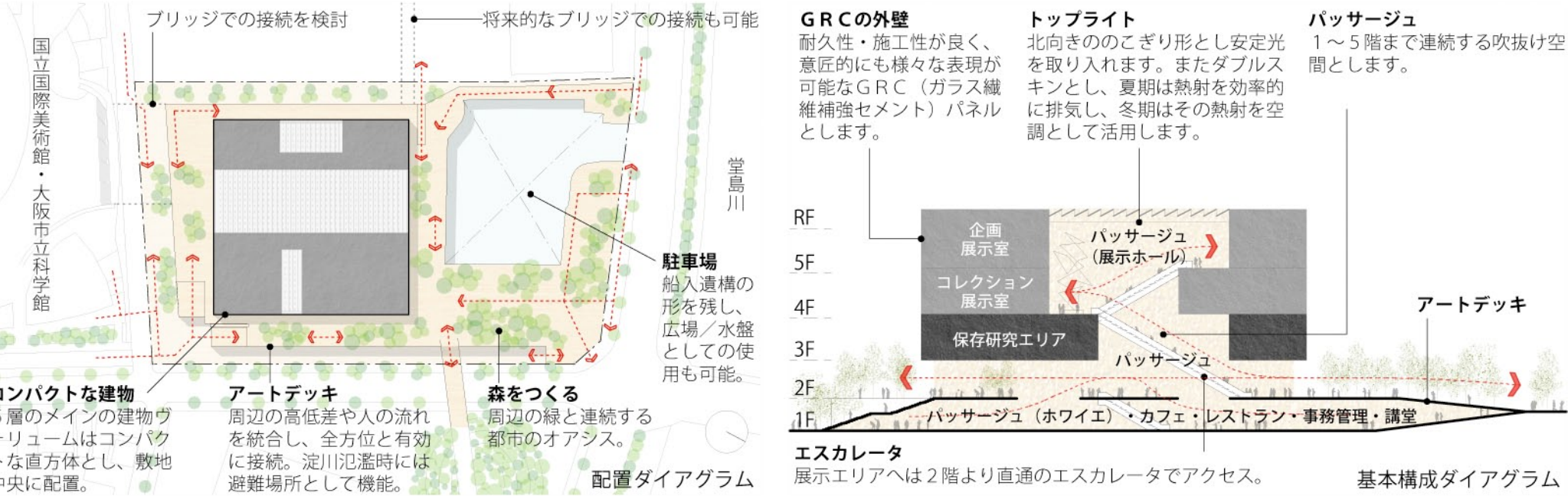
この美術館は、誰もが気軽に訪れ、学び、くつろぎ、楽しみ、触発され、そして発信する、いわば「都市空間」のような美術館です。マッスなボリュームは建物内に立体的に計画されたパッサージュによってくり抜かれ、計画された展示室はもちろんのこと、その大きな吹抜け空間も美術と触れ合うために計画されています。この建物は浮力を持って都市に浮かび上がります。そしてアートデッキと一体化となって計画されたパッサージュは、昼夜問わず賑わうパブリックスペースとして人々を迎え入れます。



設計趣旨ー新美術館の設計に対する考え方ー

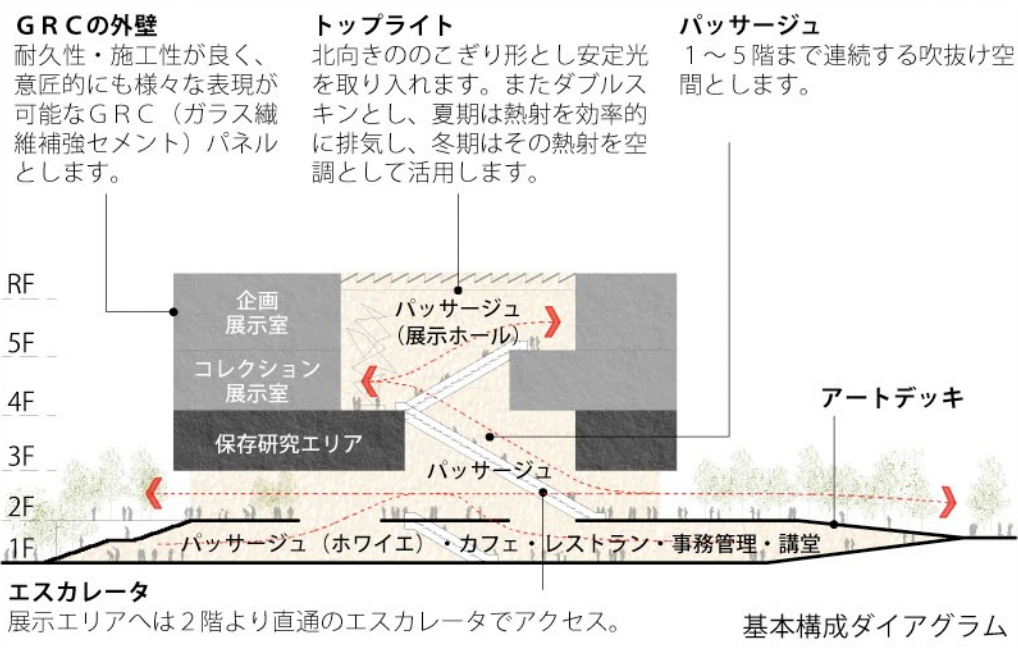
配置及び外構計画

コンパクトな建物ヴォリュームと広いオープンスペース：5層の建物ヴォリュームは約60m角のコンパクトな直方体として敷地中央に配置し、周辺に広いオープンスペースをつくりまします。周辺からの圧迫感がない配置計画とします。**公園の様なオープンスペース「アートデッキ」**：アートを核とした公園の様なオープンスペース「アートデッキ」をつくりまします。デッキは周辺の高低差や人の流れを統合し、敷地の全方位と接続します。デッキ上では様々なイベントや屋外展示を行う事が可能です。デッキ上は緑化を行い、都市のオアシス空間として、来館者に限らず市民の休憩ノ滞在スペースとします。駐車場は船入遺構の形を残し、広場ノ水盤としての使用も可能とします。デッキの床レベルはOP+約7mを基本とし、周辺の避難場所ノ防災拠点として機能します。



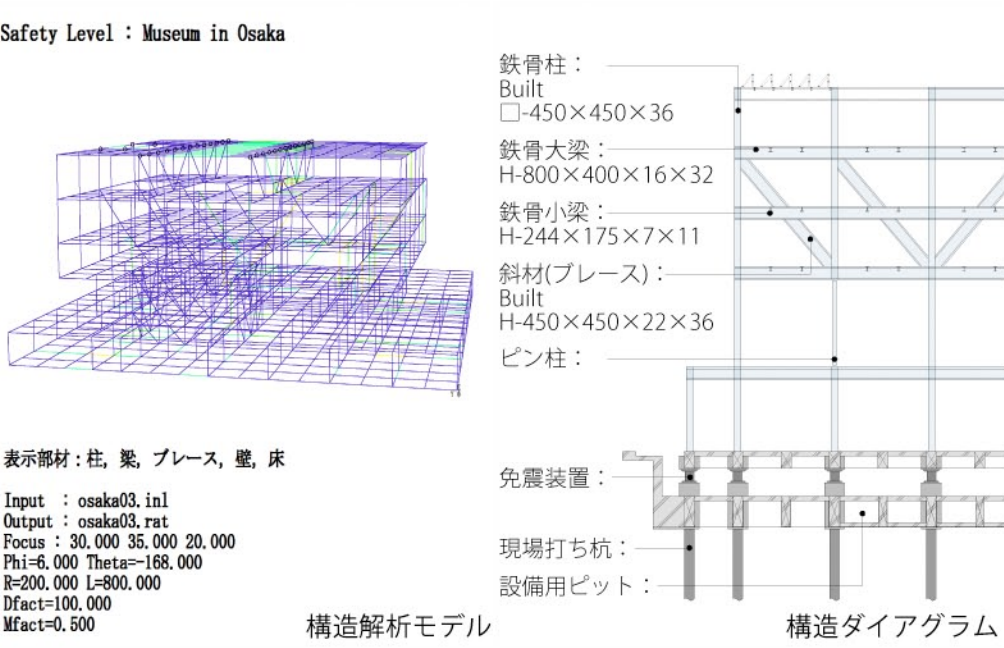
意匠計画

基本コンセプト：パッサージュを大阪新美術館のスパイン（spine＝背骨）とします。エントランスホールノ屋外空間ノホワイエノ展示ホールもすべてパッサージュの一部であると考えると、誰もが気軽に訪れ、学び、くつろぎ、楽しみ、発信し触発される、都市のような美術館を提案します。**基本構成**：建物は5層とし、1階をカフェノレストランノ講堂ノ事務エリア、2階をエントランスホールを中心としたコミュニケーションエリア、3階を保存研究エリア、4階をコレクション展示室、5階を企画展示室とします。4～5階の展示室エリアへは、2階から直通のエスカレーターでアクセスします。3～5階のヴォリュームは浮力がかかったように都市の中で浮遊し、訪れる人をパッサージュを通して内部に引込みまします。



構造計画

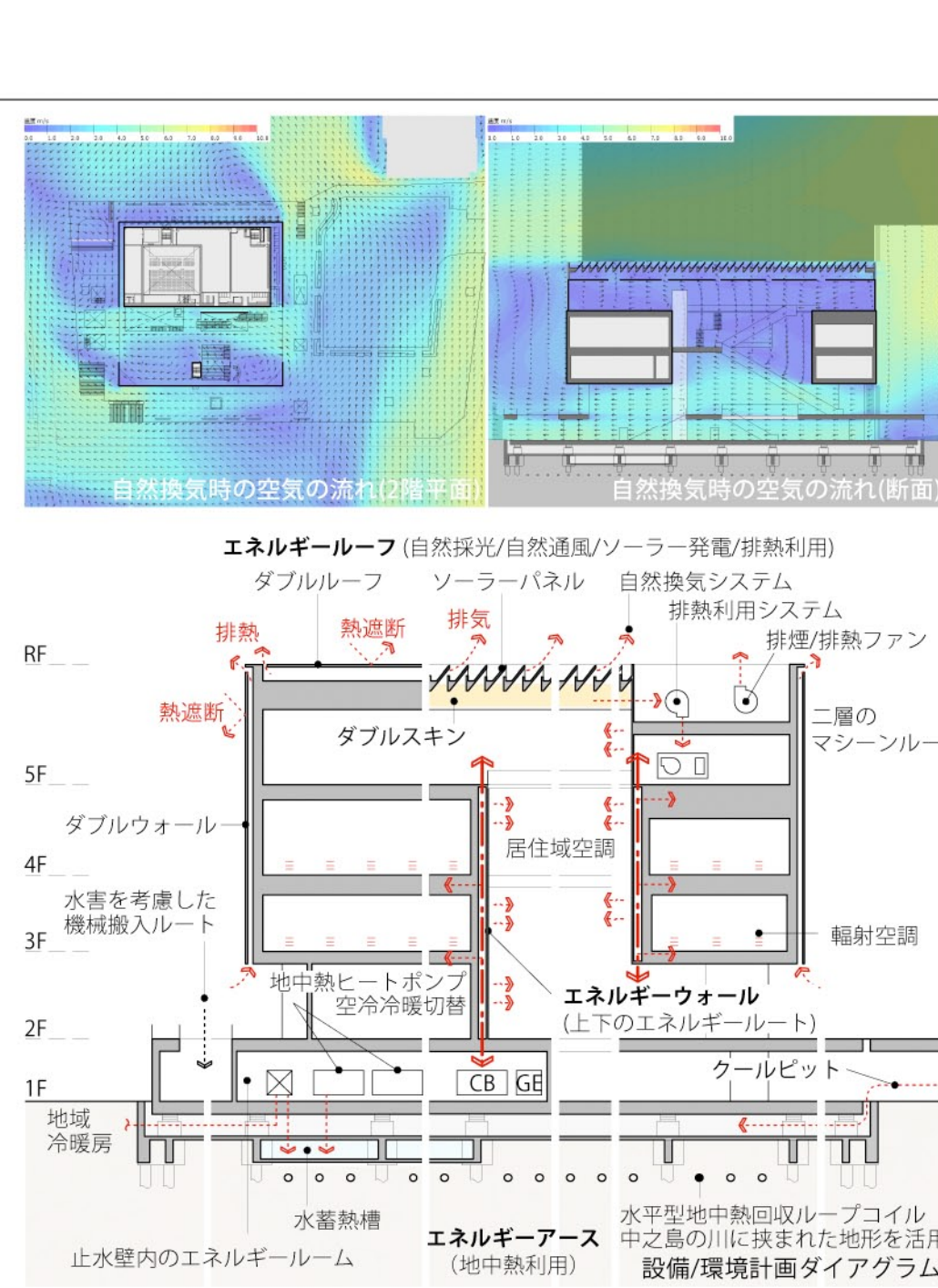
パッサージュが支えるシンプルで軽快な構造計画：鉄骨造ノ場所打ち杭ノ基礎免震を基本とします。柱のない「ワンルーム」の展示室と1～5階まで複雑に連続するパッサージュの吹抜けをつくるため、吹抜けに面して1～2層分のブレースを設けまします。パッサージュは空間的に大阪新美術館のスパイン（背骨）となるだけでなく、構造的にもスパインとして機能します。上部躯体をシンプルで軽快な鉄骨造とする事で、杭や基礎への負担も少なくなり、コストノ工期的にも有利な構造計画とします。**柱の少ない自由な空間をつくる**：4～5階共に展示室内には柱を設けず、平面計画の調整や展示計画の自由度を最大限確保します。2階のパッサージュについてもピン柱（約5ヶ所）のみとし、見通しの良い開放的な空間をつくりまします。



設備ノ環境計画

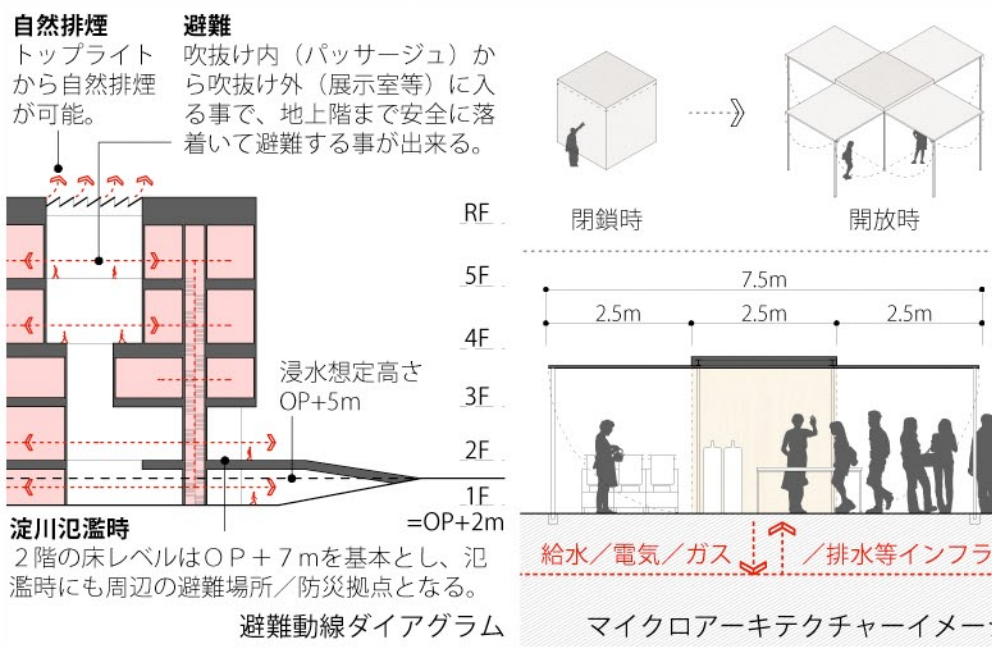
立地を活かす「エネルギーアース」：川に挟まれた本敷地は地中熱利用に最適です。地中熱ヒートポンプと地域冷暖房を水蓄熱システムとして活用し、省エネノ省コストな空調熱源を実現します。地中熱ヒートポンプは空冷切替式かつ冷水用ノ温水用の複数台とし、あるゆる空調状況に対応します。また、採熱はリーズナブルな水平ループコイルとします。複数の熱源を持つことで、災害ノ故障などの空調停止リスクを回避します。**形状を活かす「エネルギールーフ、ダブルウォール」**：5層の建物ヴォリュームの頂部はダブルルーフとし、排煙ファン、排熱ファンなどの設備スペースとして有効活用します。頂部中央はのこぎり型のトップライトです。トップライト南面は冬至の太陽光も十分吸収するソーラーパネル、風下側の北面は自然排気チムニーと、屋根全体が自然採光ノ自然換気ノ発電の省エネ装置です。壁はGRCによる二重壁として、壁のダブルスキン効果で躯体熱負荷を縮減します。

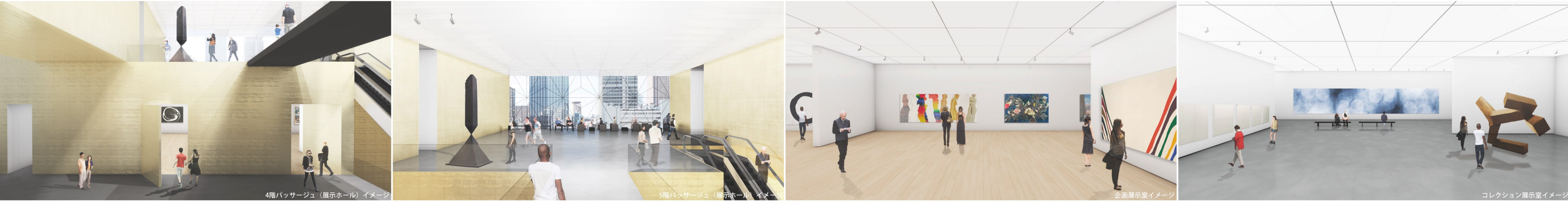
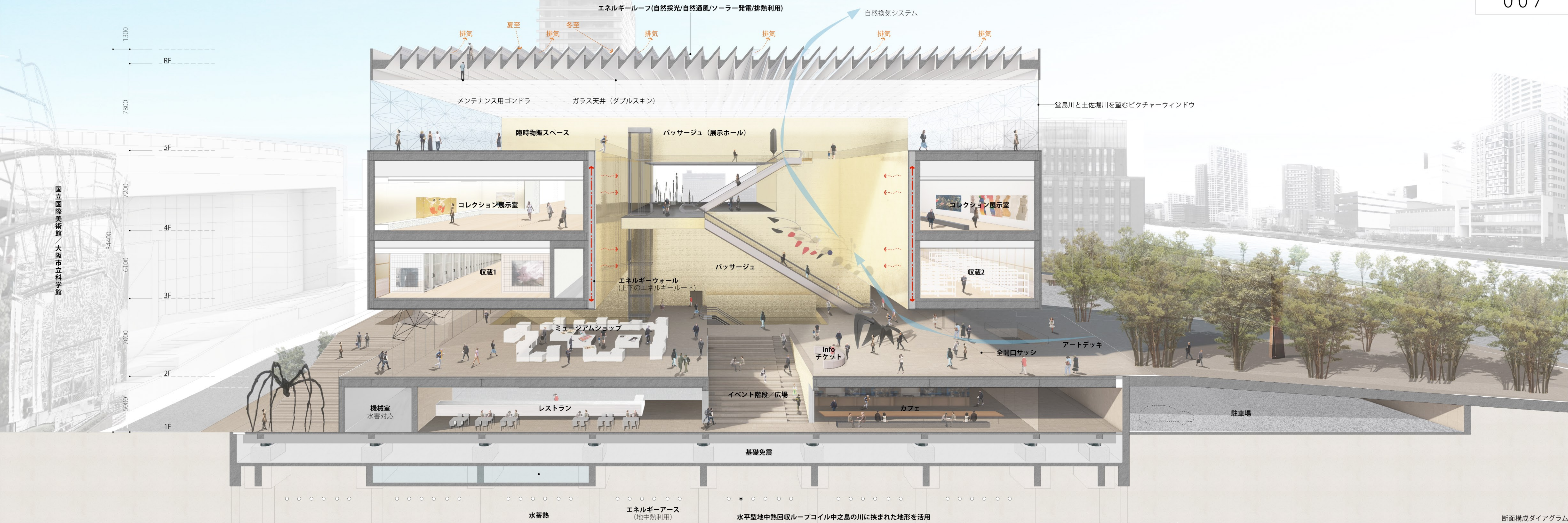
効率的な設備ルート「エネルギーウォール」：「エネルギーアース」⇒水蓄熱槽⇒エネルギー機械室で構成される下部設備と「エネルギールーフ」⇒ダブルルーフ⇒マシナールームで構成される上部設備はパッサージュを囲む「エネルギーウォール」で接続されます。エネルギーウォールは配管、配線、ダクトなどの設備ルートを集約し、かつ、パッサージュの大空間を居住域のみ空調する省エネ装置として利用します。1階に設置する設備については止水壁で囲み、浸水レベル以上で搬出入するなど万全の水害対策を講じまします。



災害対策

火災等災害時：最大8000人ノ日の来館者が安全に避難しつつもパッサージュの立体的なつながりを確保するため、全館避難安全検証法を適用します。吹抜け内（パッサージュ）を bypass して避難可能な経路をつくり、吹抜け内⇒吹抜け外（展示室等）に逃込む事で、どの階にいても安全かつ落着いて避難可能な計画とします。**河川氾濫等水害時**：2階デッキの床レベルはOP+約7mを基本とし、淀川氾濫時（OP+5m）にも周辺の避難場所ノ防災拠点として機能します。また機械室も機能を失わない計画とし、美術品の保護、防災拠点としての役割を担います。**マイクロアーキテクチャー**：防災物資の備蓄倉庫としてだけではなく、災害時やイベント時の水ノ電気ノガス等のインフラ取出し口、仮設トイレ等の排水接続口として機能します。





6つの特色

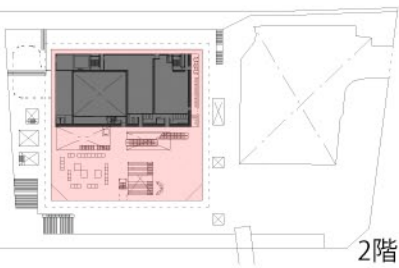
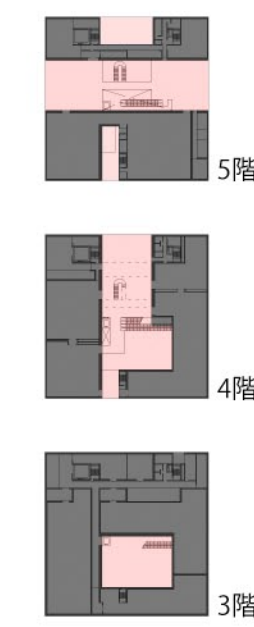
立体的につながるパッサージュ

直方体を切り欠いてつくるパッサージュ

直方体のヴォリュームを切り欠く事で建物全体を構成します。切り欠かれて残った部分（黒色）を展示室や収蔵庫等の「閉じた機能」として、切り欠いた部分（赤色）をエントランス／ホワイエ／ミュージアムショップ／展示ホール等の「開かれた機能＝パッサージュ」とします。

様々な活動と交流の場としてのパッサージュ：1階はミニコンサート等スペースとして、2階は市民が製作した作品の展示やレクチャー等のスペースとして、4～5階は大型作品を含めた現代アート作品等の一時的な展示スペースとして等、立体的なパッサージュでは様々な活動を同時に行う事が可能です。

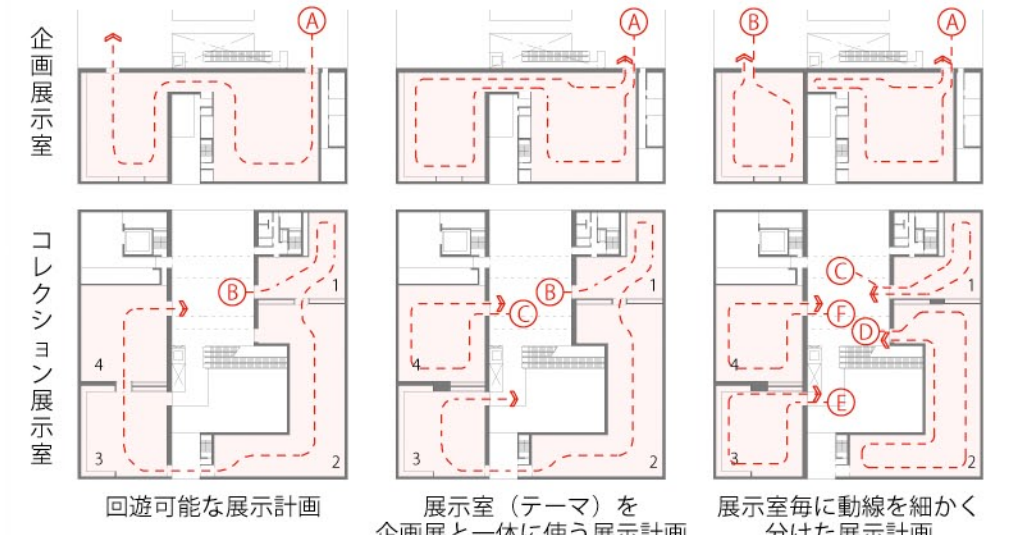
都市の展望台としてのパッサージュ：4～5階のパッサージュは、東西南北方向に十字形に抜けており、各展示室をまわると同時に、展望台として都市（中之島）を俯瞰する場とします。



シンプルかつフレキシブルな展示室

シンプルかつフレキシブルなホワイトキューブ：コレクション展示室／企画展示室共に、柱のないシンプルな「ワンルーム空間」とします。グリッド状にレールを配置した可動壁（可動間仕切り）／ライティングレール／光幕天井（共に調色調光）を基本とし、様々な展示レイアウトやライティングにフレキシブルに対応可能です。

様々な運用が可能な展示室：各展示室は、パッサージュ（展示ホール）と展示室間のそれぞれに出入口（どちらも必要のない時は閉鎖可能）を設けて数珠つなぎに配置します。展示室と展示ホールとの出入り、展示室同士の出入りが選択可能となります。展示室同士を順繰りに巡回する展示計画や、展示ホールからそれぞれの展示室に直接出入りする展示計画等、様々な展示計画にフレキシブルに対応可能です。



各階パッサージュ位置図：1階 1：グレイビナコテカールーム 3：日本近代 2：デザイン/西洋近代現代 4：テーマ 運用例ダイアグラム

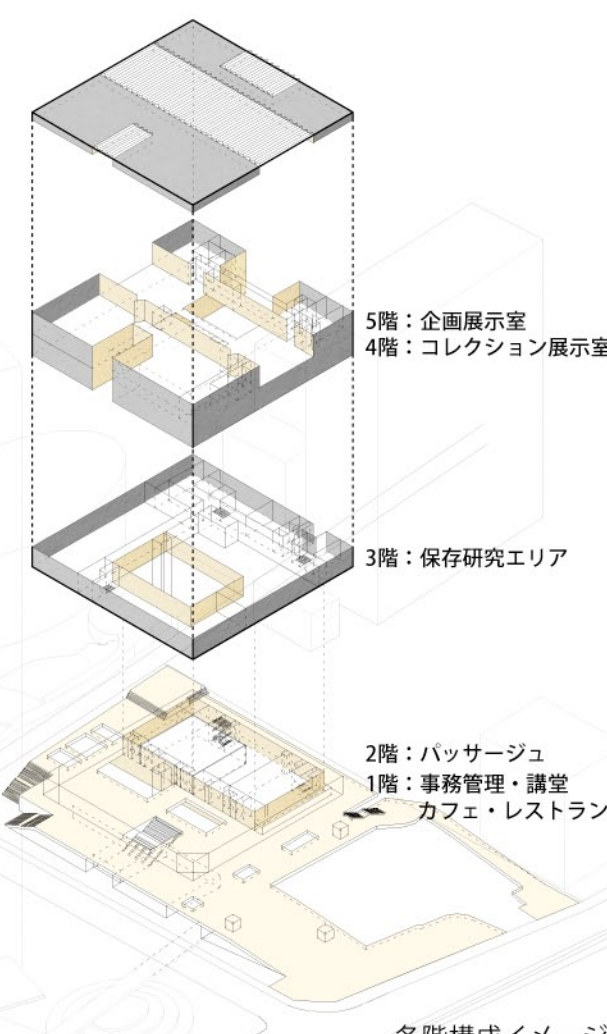
実現性の高い提案

敷地条件と機能を統合したシンプルな計画：敷地条件／要求事項に対して、意匠／構造／設備（環境）を統合した機能的でシンプルな計画とします。市民の方々の理解の下、確実に実現可能な提案です。

コスト順守：約5%の予備費を見込み、社会／経済情勢の変化による資材や労務費の高騰に対応します。既に積上げ方式による数量積算の上予算内である事は確認済です。

工期順守：直方体のシンプルな建物形状や内部プランニング／効率良い構造計画により、工期短縮を図るだけでなく人手不足や資材不足等による工事の遅延も防ぎます。

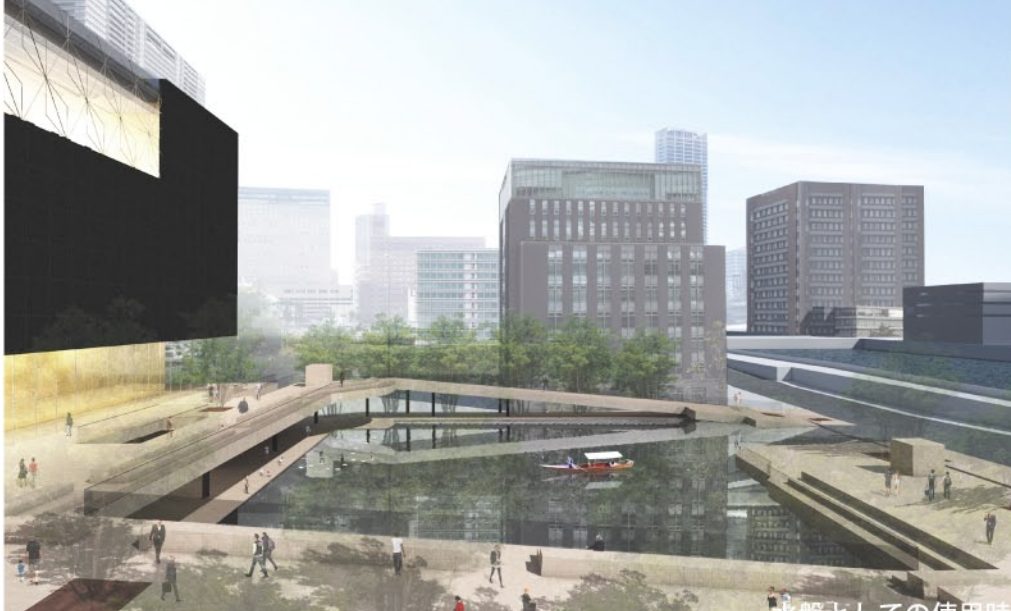
維持管理：シンプルな計画である事と適切な維持管理方法を検討する事で、実現後（完成後）の維持管理・運営コストも削減します。



水とたわむれる

船入遺構を記憶として残す：船入遺構は現状通り地中埋設保存としますが、その形状や役割を引継ぎ、広場としての使い方も可能な駐車場とします。最大水深150mm程度の水を張れるようにし、水を活かした演劇の開催、水を活かしたインスタレーション等の展示、子供の水遊びの場として等、様々な活動に活用可能です。2階の「アートデッキ」には、広場（駐車場）を取囲む様にテーブルとしての使用も可能な段状の観客席を設け、円形劇場の様な使い方が可能です。

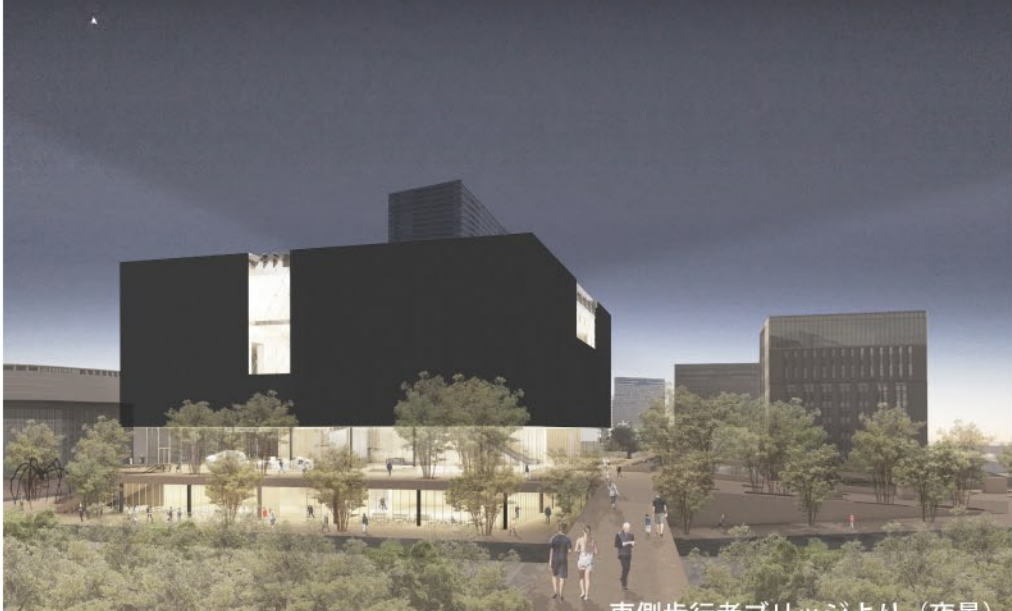
水辺の風景を再生する：かつて各藩の蔵屋敷が並んでいた中之島の水辺の風景を、船入遺構の形状をした水盤とそれを活かした様々な活動の風景として生まれ変わらせます。イベント等一時的な風景ですが、水都大阪らしい水辺の風景の一つとして、大阪の景観をかたちづくります。



光とたわむれる（照明計画）

外部照明：外観照明は控えめとし、直方体のボリュームに穿たれた開口部から、屋内の光が外部に溢れ出すデザインとします。外構及び2階パッサージュでは、手摺やベンチなど目線より低い位置に光を集める手法を用い、内外が境界なく連続する一体感のある計画とします。それは同時に2階のガラスファサードの存在を曖昧にし、新美術館が水上に浮かんでいるような特徴的な外観を創りだします。

内部照明：内部公共空間では、照明器具の存在感を排除した計画とします。大きな壁面からの反射光や光壁からの柔らかな光でベース照明を確保し、上質で快適な鑑賞空間を約束します。大空間には現代アートなどが置かれることを想定し、高天井内にキャットウォークからアクセスできる照明システムを随所に設置し、展示に対する高い柔軟性を確保します。



森をつくる

オアシスをつくる：敷地内／アートデッキは積極的に緑化をし、都市のオアシス空間として、来館者に限らず誰でも気軽に利用可能な滞在／休憩スペースとします。木漏れ日の下、デッキ上では様々なイベントや屋外展示を行う事も可能です。大阪新美術館を象徴する市民のためのオープンスペースとなります。敷地内の緑は、堂島川沿いの緑や中之島四季の丘の緑とも連続し、都市景観の形成にも寄与します。

植生を活かした緑化：地域固有の自然植生を基本とし、管理手間の少ない計画とします。建物に近い部分には落葉樹を、建物から遠い部分には常緑樹を植えます。夏はどちらも日差しを遮り、心地よい木陰をつくります。冬は内側の落葉樹が落葉する事で角度の浅い太陽光を建物内部に取り入れ、外側の常緑樹は防風林となり快適な外部空間をつくります。



